

学校と精神科医療機関の情報共有と それに影響する因子の検討

大島紀人^{1)2)†} 渡邊慶一郎¹⁾ 佐々木 司³⁾ 八木 深²⁾

IRYO Vol. 75 No. 1 (22-29) 2021

要旨

背景：思春期は精神疾患の初発時期であり，精神疾患に罹患した子どもには，医療，教育両面からの支援が必要である．学校は医療機関の地域連携先として重要であるが，両者の連携について学校精神保健の現場からその課題を指摘した研究が多くみられる一方で，医療側からこの問題を検討した研究は少ない．本研究では，精神科病院を受診した児童・生徒を対象に，学校と医療機関の情報共有について調査した．

方法：精神科病院を新たに受診した児童・生徒183名を対象に，診療録を用いた後ろ向き調査を行った．学校と医療機関の情報共有について調査し，記述統計でまとめた．情報共有と関係する因子をロジスティック回帰分析を用いて探索的に調査した．情報共有と治療転帰との関係についても解析を行った．

結果：学校と医療機関の連携は，受診した小学生の55.3%，中学生の25.0%，高校生の32.6%でみられたが，いずれも1回で終結することが多かった．情報共有の内容をみると，学校から医療機関に向けた情報提供や相談が多く，医療機関から学校に向けた情報提供は少なかった．情報共有と関係する因子として，受診が学校の勧めによること（オッズ比 3.558, 95%信頼区間 1.697-7.457）などが統計的に有意であった．一方で，1年間の追跡調査により治療転帰をみると，28.4%が治療中断していた．情報共有と治療中断の間には，統計的に有意な関係は認められなかった．

考察：今回の結果から，学校と医療機関の情報共有には，学校から医療機関に向かう方向性があることが示された．また，連携は1回で終結することが多かった．このような連携の有無は，治療の中断と関係を認めなかった．患者の治療に資するためにも，学校と医療機関の情報共有は，治療中継続することが望ましい．また，医療機関から学校に対しより積極的な情報提供を行うことで，学校と医療機関の連携の双方向性を実現していくことが重要だろう．

キーワード 学校精神保健, 思春期, 地域連携

1) 東京大学相談支援研究開発センター, 2) 国立病院機構花巻病院, 3) 東京大学大学院教育学研究科 †医師
著者連絡先：大島紀人 国立病院機構花巻病院 〒025-0033 岩手県花巻市諏訪500
e-mail : rxg01737@qq8.so-net.ne.jp

(2020年2月19日受付, 2020年11月13日受理)

Investigations of Information Sharing between Schools and Psychiatric Medical Institutions : Factors Influencing Its Impact

Norihito Oshima¹⁾²⁾, Keiichiro Watanabe¹⁾, Tsukasa Sasaki³⁾ and Fukashi Yagi²⁾, 1) Center for Research on Counseling and Support Services, The University of Tokyo, 2) NHO Hanamaki Hospital, 3) Graduate School of Education, the University of Tokyo

(Received Feb. 19, 2020, Accepted Nov. 13, 2020)

Key Words : School mental health, adolescents, regional cooperation